



学校教育目標:ともに高め合う きららの子

きらら

「地域に信頼され、地域とともにある学校」をめざして

蕪山南小学校
学校だより

発行 令和6年 12月 第8号

言葉が通じなくても分かり合えたモンゴル国交流

校長 土屋貴俊

9日にモンゴル柔道アカデミーの子供たち10名(2年生~6年生)が来校し5年生と交流しました。伊豆の国市は、平成27年にモンゴル国の首都ウランバートル市のソングノハイルハン区と友好都市交流に関する覚書を交わし、翌年には夏休み期間にモンゴル国への中学生の海外研修が始まりました。



今回5年生の子供たちは、モンゴル国の子供たちを迎えるために事前に協働まちづくり課のアノンさんから言語や生活の様子について学びました。それに加えてモンゴル語で自分の名前を書けるようにしたり、来校する10人の子供たちの名前を覚えたりと交流に積極的にかかわってきました。

当日は、一人一人の名前を呼んでお迎えしました。4時間目には習字を一緒に行い、「モンゴル」、「和」を選択して書きました。モンゴル国の子供たちは、筆をもつことが初めての経験で緊張している子もいましたが、5年生の子供たちの優しい声かけで安心できたのか笑顔がたくさん見られました。「上手」「いいよ」「大丈夫」という日本語でしたが、優しい口調のためか発言者の思いをくみ取ってもらえたようでした。

給食はランチルームで食べました。箸の使い方やソフト麺の食べ方など身振り手振りで一生懸命教える姿や、じゃんけんを教えて戯れる姿も見られました。

給食後は体育館でドッジボールをして楽しみました。すっかり打ち解けて体育館まで肩を組んで仲良く歩いていく姿も見られました。たとえ言葉が通じなくても、相手を尊重しようとする気持ちや相手の思いに寄り添う気持ちがあればすぐに仲良くなれることを実感できたのではないのでしょうか。

19日には、6年生が英語で現地の6年生とオンラインで交流します。学校生活や地域の様子を紹介するのに、どうしたら伝わるかを一生懸命学習しているところです。給食でもモンゴル料理が提供されます。互いの国の文化やよさに触れる機会になればと思います。

さて、このような交流で子供たちにどんな力がつくのでしょうか。外国語教育はコミュニケーションの手段として国際社会で実際に通用するよう、「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」の能力をバランスよく育成していくことを目的としています。さらに異なる文化や言語をもつ人々とのコミュニケーションという主体的な活動を通じて、自分の考



えを持ち、それを主張する中で合意形成していく態度・能力の育成もねらっています。今後日本ではさらにグローバル化が進み、文化の異なる人々と対話を通して豊かな関係を構築する力も求められています。互いの文化や考え方を知り、双方の「違い」を理解し、相手を尊重できる子供に育っていくことを願っています。そのためには、まずは同じ教室、同じ学校の友達など自分の周りにいる人を大切にすることから始めてほしいです。